

【成長戦略課題候補】省耕起栽培による環境再生型有機農業の実証(R6~9)

総合農業技術センター・高冷地野菜花き振興センター、環境部

背景・目的

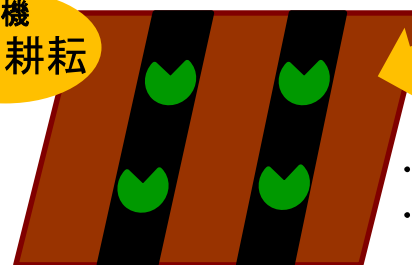
自然循環機能、生物多様性保全、温暖化対策も

- 山梨県における有機農業の特徴は全面耕耘が基本で、作付け中は通路を雑草草生とする場合もあるが、耕耘後はほ場が裸地になりやすい。
- 昨今、省耕起、カバークロープ、緑肥、雑草草生を積極的に用いて土壌に炭素を貯留し、農地を改善させる「環境再生型農業」が注目されている。
- 県内でも、作業の省力化とともに炭素や窒素の供給や蓄積に寄与する省耕起栽培を実践する有機農家が出始めている。

【本研究の目的】

◎省耕起栽培を行っている先進的な有機農家を実態調査するとともに、これらの有機栽培方式を実証する。

有機
全面耕耘



耕耘後は
通路が裸地に！

- ・大型トラクターが必要
- ・有機質肥料は**全面散布**

より環境に優しい
有機農業へ

有機
省耕起



雑草や緑肥で
通路を覆う！

- ・中～小型トラクターで十分
- ・耕耘面積少なく**省力的**
- ・施肥も畦だけで**少量**
- ・土壌に**炭素や窒素を供給・蓄積！**

研究内容

1～2年目

1. 省耕起栽培による有機農家の実態調査(R6~7)

- ・対象地域 北杜市等
- ・対象農家 有機栽培で、次項の実践農家
- ①カバークロープ、②緑肥、③雑草草生
いずれかを利用し、全面耕耘をしない農家
- ・調査項目
作付け方式、収量性、作業性、土壌の理化性(C,N量)、土壌微生物

2～4年目

2. 野菜の省耕起(半耕起)栽培の実証(R7~9)

- ・試験場所 高冷地センター有機ほ場
- ・試験区
 - ①省耕起区(畦部耕耘、通路は草生維持)
 - ②全面耕耘区(有機対照:通路は裸地)
- ・供試品目 葉根菜類、果菜類
- ・調査項目 現地調査項目に準ずる

期待される成果

- 耕耘や施肥作業の省力化が図られる。また、有機質肥料の施用量が削減でき、コスト低減が図られる。
- 草生維持による窒素の供給により、野菜の生産性が向上する。
- 有機農家の収益が向上し、面積拡大や新規参入者の増加が期待できる。
- 自然循環機能や生物多様性の保全に加え、炭素貯留により温暖化対策にも貢献できる。

※県内の有機農家(R5年3月)
面積247ha、戸数191戸

